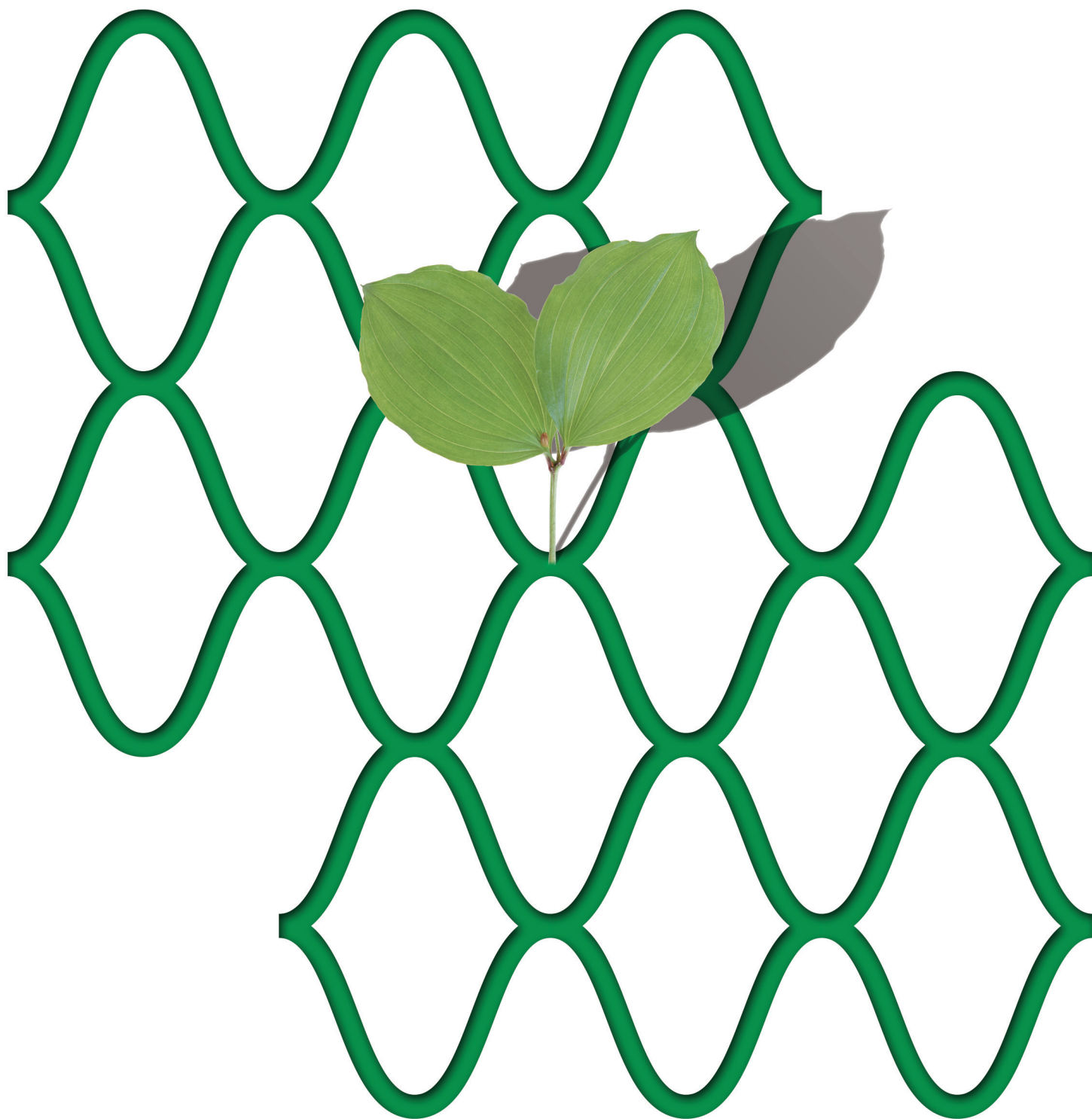




祝

2017年1月 東京大学博士号(工学)取得

藤井康幸 さん(取得時54歳)

【論文テーマ】米国におけるランドバンクによる空き家・空き地問題対処に関する研究

日本でも人口減による大量の空き家が発生する。ぜひ知見を活かしたい

■日本とは性質が違ふアメリカの空き家問題

「松田理事長が日本の伝統的住宅の研究で東大の博士号を取得されているのを知って、私は都市工学ですが、隣り合う分野の研究で、財団の支援を受け後輩になったことを光栄に感じています」そう語る藤井康幸さんの博士論文テーマは、米国の空き家問題とランドバンクによる対処。

空き家は日本でも問題になっているが、性質は異なる。日本では住まなくなった古家でも、持ち主がたまに風を通しに來たり、土地の売り時を窺っていたりするが、アメリカでは大量の空き家が完全放棄されている。デトロイト市の人口が最盛期の180万人から70万人まで減ったのは、都市の郊外化に加え、産業構造の変化により職を失った大量の人が、家を放棄したままどこかへ行ってしまったからだ。固定資産税は滞納。空き家が犯罪を誘発し、治安や環境の悪化からますます人が流出してしまう。

一方、大都市の周縁部に富裕層だけの小規模な自治体が形成され、住み分けが進む。デトロイトに似た状況の都市が、クリーブランドほか米国中西部にいくつかみられる。

■空き家問題への市場メカニズム適用の問題点

放棄された空き家を抱える市がどうしたかという、固定資産税額を抵当権として民間に売った。それを投資家が大量に買って、滞納した税額を取り立てる。取り立てに成功すると、場合によっては20%近くの手数料を得られる仕組みだ。差押物件そのものを競売にかける制度もあるが、州外や海外の投資

家が安く落札したものの、転売も利用もできず放置し、差押が繰り返されるケースも多い。

行政としては、比較的低コストで税金の未納額を回収できるといった利点はあるが、空き家の再生やまちづくりの観点はまったくない。

■ランドバンクの理念と役割

空き家の放置は社会コストとなり、まち全体の評価を下げる。市場原理では解決しにくい物件を取得して再生しようというのが、ランドバンクの仕組みだ。ランドバンクは通常、市場が見捨てた低位の物件を取得する。公的な使命を担う組織であり、税金の未納額は帳消しされる。地区の再生に資する空き家の利活用を目指す者に対しては低価格で譲渡することもできる。

物件を使いたいという人に、どんな事業計画があ



財団のLL交流会で、松田理事長や張先生、様々な分野の研究者たちと話をできるのがとても楽しみという藤井さん。

るか、当該コミュニティの団体と話をしているかなど、一つひとつ丁寧に協議、確認しながら進め、まちづくりや地域の再生につながる手法をとる。

滞納した税額、物件の市場性、再生する場合の修繕費用の勘案から、空き家を解体して更地にすることもある。空き地は、隣接地居住者に数ドルで譲り庭にしてみたり、コミュニティ団体が維持管理して、青少年プログラムのために使ったりもする。

ランドバンクを導入するためには、差押規定などの法整備、また、行政のトップや議会、地域住民の理解が必要となる。たとえば、デトロイトでは、2014年に市長が変わって、それまで機能していなかったランドバンクがやっと動き出した。

■高度な研究を続けられる環境整備を

「調査研究のため何回もアメリカを訪れたので、生涯学習開発財団の支援はとてもありがたかったです。アメリカ人はフランクで、皆、快く対応してくれました。カンファレンスに参加した際にも、アメリカの研究者から様々な刺激を受けました。研究成果はできるだけアメリカのジャーナル誌に発表したいと考えています。頼まれて、アメリカの大学の授業にネット電話で参加し、研究成果を発表することもあります。そうしたことを通じて、少しはアメリカに恩返しできるのではと思っています。」

少なくとも私の専門分野について言うと、アメリカの研究者層は分厚く、研究環境も優れています。財団の支援事業が日本の研究者のマインドアップ、研究環境の整備につながることを期待します」

キャリアアチェンجزとしての生涯学習を考える

生涯学習とは、社会と共に生き続けるために、年齢に関係なく学び続けること。それは若者にも当てはまる。第一線で活動しながらキャリア形成中のパネリストから、若者へのメッセージを引き出した。

荻宿 本日のトークセッションでは、若い方の生涯学習のイメージを変えたいという目的があります。以前の生涯学習は「ライフリング」、長寿の時代に生きがいを作っていくでしょう、特に「定年後の人生を豊かに」というイメージが強かったですね。しかしいま、生涯学習は「ライフワイド」が標準になりつつあります。

本日のパネリストはそれぞれ違う分野で取り組みをされていますが、3人に共通するのは、キャリアアチェンجزといえますが、自分の使命といえる道造りをまさにやっている最中の方なんです。今までの生涯学習の語り口だと「やってきました」と過去形の話で終わるんです。それを「今こうやってます」という、進行形の生涯学習を感じてもらおうというのが、今日の試みです。ま



コーディネーター
荻宿 俊文
青山学院大学
社会情報学部 教授
NPO法人ワークショップデザイン
ナー推進機構 理事

特設トークセッション

多元的共生社会における生涯学習を考える | 2017年3月29日 生涯学習開発財団にて |



パネリスト
石本 めぐみ
NPO法人ウィメンズアイ
代表理事

ずは順に自己紹介をお願いします。

石本 私は宮城県南三陸町で女性支援をする、NPO法人ウィメンズアイの代表をしています。私の場合、東日本大震災で人生が一変しました。震災前は外資系の金融企業で社長秘書をしていたのですが、震災後に被災地に行き、1週間か2週間、ボランティアをしてくるつもりが、戻ってこないで任意団体を立ち上げて、活動を始めて6年が経ってしまいました。宮城県沿岸部でずっと活動を続けています。

安永 Uber Japan(株)という外資系企業で政府渉外などを担当しています。Uberは、ライドシェアという、車を持つ人が運転手として働きたいときだけネットワークで登録し、移動したい人とマッチングするシステムがメインです。6年前にサンフランシスコで始まり、70か国450都市に広がっていますが、日本ではまだ認可されていません。しかし、ウーバーイーツという、レストランなどのデリバリーを共有するシステムが去年から始まり、こちらは規制は

ありませんので順調に伸びています。

私はもともと日本の会社で働いていたんですが、ワシントンDCに向向してシンクタンクを立ち上げることにになり、日米の政府の方ともお仕事をしながら「面白いな」と。そこから人生が変わり始めました。

竹村 ある企業のフェローを務めながら、自分自身の団体FutureEdu Tokyoをやっています。21世紀教育を親や教育関係の方と話し合ったり、情報発信をしたりするコミュニティです。他にもいくつかの教育関係プロジェクトや、社会起業家支援のプログラムをやっています。という感じで、一言で表現しづらいモラトリアムなステージにあります(笑)。



パネリスト
竹村 詠美
FutureEdu Tokyo
Co-Founder

というのも、インターネットの黎明期から関連企業をいくつか経験した後、約30万ユーザーがいる事業のスタートアップを4人でやってきたんですけれども、子どもが産まれて日本に戻ってきたときに、日本の教育に対して考えることがありました。関わってきたテクノロジーが社会に与える影響と、子どもがいる日常とのギャップにかなり悩まされました。そこで、今まで自分自身が事業側で前のめりにやっていたところから、少し後方支援に立ち位置を変

えているところですよ。

荻宿 大震災については、私も実家が浪江町なのですが、石本さんはなぜ被災地で女性に注目したのですか。

石本 避難所で女性たちが人に言いにくい悩みを抱えているとか、自分達が必要な物資が来ないということが度々あって、それはシステムの問題もあるんですけど、どちらかと言うと東北地方の人たちの意識や文化的な背景を感じたんですね。言いたいけど迷惑かけちゃいけないとか、息苦しさ、生きづらさのようなもの。年配の方だけでなく、若い女性も一度東京に出たら地元に戻りにくいとか。それを変えたいと思い活動を始めました。

荻宿 どんなふうに変わってきたか、エピソードはありますか。

石本 南三陸町から宮城県各地、福島、岩手へとつながり、何年か前からアジアやラテンアメリカの国ともつながる活動をしています。そうすると、もっと何かができるという可能性も見えてくるんです。たとえば、昨年からコミュニティで始めたミニファンドを使って、仮設住宅に住んでいる30代のママが2人で組んで、「ママフェスタ」を企画しました。地域で初めての試みでしたが、200人も人が集まったんです。市の職員や議員も視察に来ました。なぜなら、市がやっている親子サロンには人が来ないんです。

荻宿 すごいですね。女性ならではの言い方もいい、世話焼きの意識が周りの人に波

生涯学習はライフロングからライフワイドへ



及していくのではと感じます。

次は安永さんに、順調に伸びている方のウーバーイーツについてお聞きします。

安永 レストランなどの配達を、ネットのアプリを使って地域で効率よく共有するシステムです。お店は配達のための人手や車両を持たなくても販路が広がります。利用者は人気店の味を自宅でも楽しめます。配達する人は半日でも1時間でも、働ける時間だけアプリでONにします。シフトも何



パネリスト
安永修章

Uber Japan 株式会社
政府渉外・公共政策担当部長

荻宿 「知らない人に配達を任せて大丈夫？」という不安はどう解消していますか。

安永 お店も注文者も、その時選べる配達員の顔や名前をアプリから見られるんです。最高5つ星の評価も参考にできます。しかもGPSで配達員がどこにいるのか、リアルタイムで分かるわけです。どこにいるか見られていて評価も付くわけですから、不誠実なことではできません。

美味しいけど小さなお店、少し不便な場所のお店、宣伝力がない場合もウーバーが手伝います。配達員には、学生、役者やアーティスト、シングルマザー、引きこもりがちな人なども就きやすく、「新しい働き方」や「シェアリングエコノミー」の一端を担

う社会貢献事業でもあります。

荻宿 本日のテーマにもつながる、いろんなチヨイスがあるということですね。自分の基準を持つ、自分の目を信じられる若者を育て一つの環境かもしれません。

では竹村さん、若者の後方支援という立場もあるそうですが、そのあたりのお話しをお願いします。

竹村 自己実現としてのキャリア形成よりも若者の後方支援が楽しくなってきたというのは、やはり子どもができたことが大きいと感じます。子どもって、すごい速さで成長します。若い世代もちょっとヒントを与えただけで、自分たちより遥かに成長する姿をたくさん見ます。自分の力で1を10にするより、10人の人が力を発揮するつなぎ役になることで、むしろ社会に対するインパクトは大きくなるんですね。

荻宿 ものすごく成長する中で、転んでしまったら、何か悩んでいたときに、どんなサポートをしていますか。

竹村 私たちのスタートアップも最初そうだったのですが、井の中の蛙的に視野が狭くなることがあります。そういう時に、「一歩引いて顧客の立場で見たら」とか「こういう見方もできるよね」と、経験的視点でいっしょに見直すことがあります。また、やる気と能力がある方って、やりたいことが多すぎる場合が多分にあって、そこを削ぎ落としてあげるのも私の役割としてあります。最初の起業プランのままだと成功することはまずありませんから。

荻宿 3人の取り組んでいることをお聞きして、面白いなあと改めて思いましたが、どういういきさつでこの生き方を選ばれたのか。私自身も別の仕事から大学の教員に変わったわけですが、いつ何をどうチェンジしたか、なぜそうしたかということを含めてお話しいただければと思います。今度は逆順でお聞きしましょう。

竹村 私が社会に出たのは男女共同参画が言われ始めた頃で、私も総合職として企業に就職しましたが、何か総合職はこうあらねばならないというような束縛感があって、自分は日本企業に向いてないなと感じて辞めました。力をつけてプロとしての選択の自由が欲しかったので、お金と経営のことを勉強して金融機関へ、その後コンサルタントになりました。若造で企画書上ではありましたが、それなりに自信になりました。そのスキルに、これだと感じたインターネットの技術を掛け算する形で、今につながっています。

安永 私も現在進行形ですが、日本企業、NPO、外資系とひと通り経験しました。日本企業にも良いところはありますが、アメリカ企業は責任もあるけど楽しかったです。年齢は関係なく、全部自分でやりなさいと。リスクもあるけど、何か武器が一つあればやっていける自信ができました。その経験の後、いろんな外資系の会社から声がかかるようになりました。でも、日本の会社には戻れないと思います。

石本 いつのときも学びが自分を変えてき

常にingであること、そして多様性

交流会中に、進路を模索中と思われる20歳前後の若い参加者たちから感想を聞いた。

- とても強烈だった。自分がやりたい事業をやっている方の表情はみな素敵だ。
- 就活中で、社会に求められる姿と自分がやりたいことのギャップに混乱していた。お話を参考に見つめ直したい。
- 与えられるのではなく、自分の中に何かを見つけ、引き出すのが学びだとわかった。
- やはり留学経験は役立つと感じる。すでに目標は定めているが視野を狭くしないようにしたい。
- 荻宿先生のファシリテーションが素晴らしい。自分なりのキャリアを積んで大企業のパーツではない生き方をしたい。



たと思います。高卒で派遣という立場が不安になり、30代から通信で短大を卒業し、夜間の大学へ編入、大学院へとステップアップしました。仕事も契約、正社員へと安定したことで余裕ができ、ボランティア活動もしました。養護施設で育った高校生と1年くらい過ごすプロジェクトでしたが、自分が知らない世界を知って、自分が社会のために何ができるか考えるようになりました。大震災があったとはいえ、また、大学でCSRや社会事業を勉強してはいたもの、自分自身が社会課題解決に取り組むとは想像していませんでした。やってみたら「できるんだ」という感じで、2週間の予定が6年になりました。

荻宿 このあたりで会場の若い方の声を聞いてみたいと思います。いかがでしょう。

質問者 3方ともすごく能動的に生きておられる感じがします。自分は今まで受動的に生きてきて、それが悩みでもあるのですが、どうすれば能動的に切り替えることができるのでしょうか。

荻宿 これ、とても大事な質問です。何かの理由で変わってくるわけです。若い方がチャンネルを切り替えるにはどうするか。ひと言お願いします。

竹村 好奇心が大切だと思います。誰もが赤ちゃんのときは好奇心のかたまりなのに、だんだん周りに合わせてしまいきます。ボランティアに参加するとか、クラウドファンディングで共感できる事業を見つけて支援してみるとか、自分の好奇心を満たす喜び

を一度味わうといいと思いますよ。

安永 矛盾したことを2つ言います。何が何でもやりたくなることにいずれ出会うと思いますので、いまは無理しないことも大切です。もう一つは逆に、あえて荒波の中に飛び込む方法。組織や先輩から守られていた日本企業から、アメリカ企業にいきなり放り込まれた際、受け身のままでは生きていられませんでした。

石本 荻宿先生もおっしゃいましたが、内省の時間がとても大切です。10人位でシアトルにリーダー研修に行った際、なぜ自分はこの活動をやっているのか、毎日振り返りだったのです。そうすると、自分の自信の無さがわかるんです。自分の鎧を剥いでいって、そこから深めていくことで、皆別人のように変わりました。

荻宿 若い方に生涯学習を考えてもらう機会でしたが、いかがだったでしょうか。常に生涯学習というのはingであること、そして生物として生き残るための多様性につながるのはないでしょうか。

☆

佐藤(財団事業部長) 荻宿先生、石本様、安永様、竹村様、そして急なご案内にも関わらずご参加くださった皆様、ありがとうございます。そして、3人の素晴らしいパネリストをセッティングしてくださった、一般社団法人C4の長尾純子様には、特別に感謝申し上げます。この後パネリストも交えての懇親会もありますので、ご交流やご質問をしてお楽しみください。